

2019年6月16日 週報巻頭言

「父の日」に寄せて

本日は「父の日」ですが、影が薄いですね。由来は米国ワシントン州のソナラ・ドッドという女性が、教会で「母の日」の説教を聞いていて、「父の日」もあるべきだと考えたのです。なぜなら母親の亡き後、ソナラと5人の兄を男手一つで育ててくれた父親を敬愛していたからです。ソナラは自分が通う教会の牧師に頼み、「父の日」礼拝が行われたのが1909年6月19日でした。その後、ワシントン州では6月の第3日曜が「父の日」となり、米国で国民の祝日として定められたのは、1972年のことです。

この日に、「父」のことを少し。私が生まれた家は福岡県のバプテスト教会の牧師家庭でした。私にとって教会は遊び場であり、兄や姉世代の方々と楽しく過ごした良い思い出の場所です。進学のため東京に出た私はしばらく教会に行きませんでした。でも「離れた」機会を通して、幼い頃から身近だった、「信仰」ということを改めて考えるようになったのです。時を経て礼拝に再びつながり、奉仕を通して、信仰者との出会いを通して、牧師になることを決意しました。私の父は優しい人でしたが、厳格でも立派でもありませんでした。人間としての悩みや弱さも家族のゆえに知っています。父親が立派で、素晴らしい人だったら私は牧師になろうなど思わなかったでしょう。

献身を祈っていた頃、父に尋ねました。「社会的経験もない人間が牧師としてやっていけるだろうか」と。父は「今、その思いが与えられているならやってみなさい。神の御心なら道は開け、御心でなければ閉ざされるから」、そして「お前は愛される牧師になるよ」と励ましてくれました。父は本年1月に召天。福岡有田教会員でしたが、教会に無理をお願いし、私が葬儀司式をしました。キリスト者の恵み、救いの恵み、牧師として歩める恵みを、真の「父」なる神さまに深く感謝しています。

(所沢キリスト教会牧師 坂本 献)